

アウグスティヌスが最後まで取り組んだのは、ペラギウス派との論争である。そして、その問題はアウグスティヌスの死を越えて続いた。とくに、南フランスにおける論争は重要である。この論争一つを見ても、古代末期と中世初期の間には、知の断絶よりも問題の継承と知の変わらない営みがある。そこには、知の単純な連続はないとしても、いわば知の不連続の連続を認めねばならない。そこでは、太い実線は引けないとしても、はっきりとした破線は描けるのではないかと思われる。

意見

加藤 和哉

古典古代の知の営みは「暗黒の中世」において窒息させられ、その再生を掲げた「ルネサンス」とともに近代が始まるという思想史を受け入れるものは、さすがに中世哲学研究者にはいないであろう（それは一般には、いまだ完全に葬り去られたとはいえないとしても）。だがこれに対して、中世においても、古代哲学の精神が確かに継承され、豊かな展開を見せたということを強調する場合（そしてそれがそれ自体としては正しいとしても）、そのことだけでは必ずしも、前者と同じ陥穽を免れているとはいえない。なぜなら、断絶と再生を語るにせよ、連続的發展を語るにせよ、その変化（ないし同一性）の基体として、古典古代から西洋中世がひとつの全体をなすことを前提しているという点で、違いはないからである。

このような知的中心の「移動」という理解が、一つの西洋中心主義的なイデオロギーに基づく固定観念に過ぎないということへの反省は、既に始まってはいるが（たとえば、Alain de Libera, *La philosophie médiévale*, Paris: Presses Universitaires de France, 1993, p. 6）、同じイデオロギーを共有するのではないわれわれも、そのような見方からどれほど自由であるだろうか。今回のシンポジウムの標題に掲げられた「古代末期からカロリング・ルネサンスへ——知の断絶か連続か」という問題意識においても、そこで思い浮かべられる「古代」と、カール大帝の時代とは、どのように並置させられていたのか。この点で、清水氏が提示された年表は、はからずも、われわれの中世哲学研究の現状の見取り図を示すことにもなったように思う。古典古代への関心は、アルプス以南の東地中海世界に注がれ、ガリアやブリタニアの「古典古

代」には向けられていない。一方、西洋中世に関心を持つものの視野は、同時代のビザンツや東西イスラムにたいして十分開かれたものではない。このシンポジウムをひとつの端緒として、われわれの共同研究の場に、よりバランスのとれた視座が打ち立てられねばならないと、自省を込めて思う。

さて今回の提題において、野町、清水両氏とも、さしあたり西ヨーロッパにおける自由学芸の伝統について、少なくともローマ帝国の政治制度上の終焉と重なるような終端を見いだすことはできないし、また、それが暗黒の数世紀を隔てて、9世紀において突如復活せしめられたというような見方もできないことを示されたと思う。ただ、清水氏がその上で、この時代の知的文化に対して「局地的断絶」および「長期低落傾向」という診断を下そうとするならば、自由学芸の状況に対する所見だけをもってするのは、不十分なのではないか、というのも、この時代の学問的関心の中心は、何よりも聖書や教父の教えにあったと考えられるからである。この点について、私自身に識見も定見もあるわけではないが、今後の課題とするとともに、学兄諸氏のお考えを仰ぎたいと考えている。

意見

水落 健治

古代末期からカロリング・ルネッサンスに至る時代において、古典写本の収集・整理が行われ、それらの保存のために図書館（ヴィヴァリウム修道院など）が建設されたことは広く知られている。だがわれわれは、この一連の運動を介して、古代の知的遺産が十全な形で後世に伝承されて行ったか否かについては、若干の疑念を抱かざるを得ない。当時成立した写本の多くがアウグスティヌス等の教父の著作に偏っていること、自由学芸で培われた異教古代の知的遺産が、この時代になると、カシオドロスやイシドルスなどの百科全書的著作において平板な形で扱われることになったことなどの事実は、この時代が、古代の知的遺産を後世に伝承するに際しての断絶の時代であったことを示しているようにも思われる。

けれども、われわれは、「カロリング・ルネッサンスにおける文化の断絶」を論じるに際して、書物（=写本）なるものが、現在とは異なった仕方で用いられていたこ